

仏教の戒律集 経典集 用語集 [仏教 密教 禅宗]

江川剛史（編集）

[仏教の戒律]

[四諦]

苦諦：この世界は苦しみに満ちていると明らかにする。

集諦：苦の原因がなんであるかを明らかにする。

滅諦：苦の原因を滅すれば苦も滅することを明らかにする。

道諦：苦の滅を実現する道を明らかにする。

[十二支縁起]-苦のメカニズム

- 1.無明（現象が無我であることを知らない根源的無知）
- 2.行（潜在的形成力）
- 3.識（識別作用）
- 4.名色（心身）
- 5.六入（六感覚器官）
- 6.触（接触）
- 7.受（感受作用）
- 8.愛（渴愛）
- 9.取（執着）
- 10.有（存在）
- 11.生（出生）
- 12.老死（老いと死）

[四法印]

- 1.諸行無常印（無常印） - 『すべての作られたものは、無常である。』
- 2.諸法無我印（無我印） - 『すべてのものは、我ならざるものである。（もしくは、実体がないものである）』
- 3.涅槃寂靜印（涅槃印） - 『涅槃は安らぎ（幸福）である。』
- 4.一切行苦印（苦印） - 『すべての作られたものは、苦しみである。』

[業自性正見]-業を自己とする正見。

生きとし生けるものは、

- ・業（だけ）を自己の所有とする
- ・業（だけ）を相続する
- ・業（だけ）を（輪廻的生存の）起原、原因とする
- ・業（だけ）を親族とする
- ・業（だけ）を依り所とする

[十事正見]

- 1.布施の果報はある
- 2.大規模な献供に果報はある
- 3.小規模な献供に果報はある

- 4.善悪の行為に果報がある
- 5.（善悪の業の対象としての）母は存在する（母を敬う行為に良い結果があるなど）
- 6.（善悪の業の対象としての）父は存在する（父を敬う行為に良い結果があるなど）
- 7.化生によって生まれる衆生は存在する
- 8.現世は存在する
- 9.来世は存在する
- 10.この世において、正しい道を歩み、自らの智慧によって今世と他世を悟り、（それを他者に）説く沙門、バラモン、正行者は存在する。

[四諦正見]

- ・ 苦諦についての智慧
- ・ 苦集諦についての智慧
- ・ 苦滅諦についての智慧
- ・ 苦滅道諦についての智慧

[正思惟]

正思惟（しょうしゆい）とは、正しく考え判断することであり、出離（離欲）を思惟し無瞋を思惟し、無害を思惟することである。
財産、名誉、など俗世間で重要視されるものや、感覚器官による快楽を求める「五欲」など、人間の俗世間において渴望するものの否定である。

[正語]

妄語（嘘）を離れ、
綺語（無駄話）を離れ、
両舌（仲違いさせる言葉）を離れ、
悪口（粗暴な言葉）を離れることである。

[正業]

正業（しょうごう）とは、
殺生を離れ、
盗みを離れ、
性的行為（特に社会道徳に反する性的関係）を離れることをいう。

[正命]

正命（しょうみょう）とは、
殺生などに基づく、
道徳に反する職業や仕事はせず、
正当ななりわいを持って生活を営むことである。

[正精進]

正精進（しょうしょうじん）とは、
四正勤（ししょうごん）の実践。
「すでに起こった不善を断ずる」。
「未来に起こる不善を生こらないようにする」。

「過去に生じた善の増長」。
「いまだ生じていない善を生じさせる」。

[正念]

正念（しょうねん）

四念処（身、受、心、法）に注意を向けて、常に今現在の内外の状況に気づいた状態であることが「正念」である。

[正定]

正定（しょうじょう）

正しい集中力（サマーディ）を完成することである。

[涅槃]

1. 有余涅槃・無余涅槃とわかるもの。
2. 灰身滅智、身心都滅とするもの。
3. 善や浄の極致とするもの。
4. 苦がなくなった状態とするもの。

[縁起]

『原因によって結果が起きる』という因果論のこと。

- ・ 煩悩があれば苦がある。
- ・ 煩悩がなければ苦がない。
- ・ 煩悩が生ずれば苦が生じる。
- ・ 煩悩が滅すれば苦が滅す。

[護摩]

1. 息災法…災害のないことを祈るもので、旱魃、強風、洪水、地震、火事をはじめ、個人的な苦難、煩悩も対象。
2. 増益法…単に災害を除くだけではなく、積極的に幸福を倍増させる。福德繁栄を目的とする修法。長寿延命、縁結びもその対象。
3. 調伏法…怨敵、魔障を除去する修法。悪行をおさえることが目的であるから、他の修法よりすぐれた阿闍梨がこれを行う。
4. 敬愛法…調伏とは逆に、他を敬い愛する平和円満を祈る法。
5. 鉤召法…諸尊・善神・自分の愛する者を召し集めるための修法。

[十三種類の徳]

1. 菩提心を発している。
2. 妙慧と慈悲とがある。
3. 諸芸（阿闍梨の五明）を兼ねて統べている。
4. 善巧に般若波羅蜜を実修している。
5. 三乗に通達している。
6. よく真言（マントラ）の実義を理解している。

- 7.衆生の心を知っている。
- 8.諸仏・菩薩を信じている。
- 9.伝法灌頂を得ていて、妙に（自ら興味をもって）曼荼羅の図像を理解している。
- 10.性格は、調柔（柔和）にして、我執を離れている。
- 11.真言行において善く決定することを得ている。
- 12.瑜伽（密教ヨーガ）を究習している。
- 13.勇健（勇猛で健全）の（勝義）菩提心に安住すること。

[因果]

- 善因善果（ぜんいんぜんか）…善を行うことが新たな善を促す。
悪因悪果（あくいんあつか）…悪を行うことが新たな悪を促す。
善因楽果（ぜんいんらつか）…善を行うことが自分にとって望ましい結果を招く。
悪因苦果（あくいんくか）…悪を行うことが自分にとって望ましくない結果を招く。

[諸法実相]

- 1.どのようなものでも存在するかぎり、相（形）がある。
- 2.相には、性（本質）がある。
- 3.相・性には、体（体質）がある。
- 4.相・性・体には、力（能力）がある。
- 5.相・性・体・力には、作（作用）がある。
- 6.相・性・体・力・作には、因（直接的な原因）がある。
- 7.相・性・体・力・作には、縁（間接的な原因）もある。
- 8.相・性・体・力・作・因には、果（因に対する結果）がある。
- 9.相・性・体・力・作・縁には、報（縁に対する結果）がある。
- 10.相・性・体・力・作・因・縁・果・報には、
本末究竟等（本の相から末の報までが究極的に無差別で等しく関連している）がある。

[四有]

- 衆生が輪廻転生する過程のこと。
- 1.死んでから次の生を受けるまでの期間である中有(ちゅうう)。
 - 2.それぞれの世界に生を受ける瞬間を意味する生有(しょうう)。
 - 3.生を受けてから死ぬまでの一生の期間である本有(ほんぬ)。
 - 4.死ぬ瞬間を意味する死有(しう)。

[三界（さんがい）]

・欲界

淫欲と食欲の2つの欲望にとらわれた有情の住む処。
六欲天から人間界を含み、無間地獄までの世界をいう。

・色界

欲界の2つの欲望は超越したが、物質的条件（色）にとらわれた有情が住む処。
この色界は禪定の段階によって、4つ（四禪天）に分けられ、またそれを細かく18天に分ける。

・無色界

欲望も物質的条件も超越し、ただ精神作用にのみ住む世界であり、禪定に住している世界。

[四薰習]

・[無明薰習]

衆生は無始からの無明を持っている。

真如に薰習し、その薰習によって妄心を生ずるのである。

妄心とは業識である。

・[妄心薰習]

この妄心が還って無明に熏じて不了の念を増やすことになるから、さらに妄境界を現行することとなる。

妄境界とは、転識および現識のことである。

・[妄境界薰習]

この妄境界は還って妄心を熏動して諸々の浪を起して、種々の業を造って身心の苦を受ける。

分別事識がこれである。

・[浄法薰習]

これには二つある。

・真如薰習とは、衆生が真如の法を具備しているので、無明に冥熏することができる。冥熏の因縁によって、妄心に、生死の苦を厭い涅槃を樂求させるのである。

・妄心薰習とは、この厭求の妄心が還って真如に薰習することによりその勢力を増し、種々の方便随順の行を起して無明を滅する。

無明が滅するから心相みなことごとく涅槃を得て自然の浄業を成就する。

この薰習によって浄法が不断となる。

[三業]

・身業（しんごう） - 身体の上に現る総ての動作・所作のこと。

悪業では偷盜・邪淫・殺生（ちゅうとう・じゃいん・せっしょう）など。

・口業（くごう） - 語業ともいう。口の作業、すなわち言語をいう。

悪業では妄語・両舌・悪口・綺語（もうご・りょうぜつ＝二枚舌・あつく・きご＝飾った言葉）など。

・意業（いごう） - 意識・心のはたらきで起こすこと。

悪業では貪欲・瞋恚・邪見（とんよく・しんい・じゃけん）など。

[三時業]

業によって果報（むくい）を受ける時期に異なりがある。

順現法受業（じゅんげんぼうじゅごう） - 現世において受くべき業。

順次生受業（じゅんじしょうじゅごう） - 次の生で受くべき業。

順後次受業（じゅんごじじゅごう） - 三回目以降の生において受くべき業。

[三十七道品]

・四念住（四念処）四種の観想

身念住（体があるがままに観察する）

受念住（受があるがままに観察する）

心念住（心があるがままに観察する）

法念住（法があるがままに観察する）

・四正断（四正勤）四つの努力

已生悪断（すでに生じた悪は除くように）

未生悪令不生（いまだ生じてない悪は生じないように）
未生善令生（いまだ生じていない善は生ずるように）
已生善令増長（すでに生じた善は増すように）

・四神足（四如意足）四つの自在力
欲（すぐれた瞑想を得ようと願う）
精進（すぐれた瞑想を得ようと努力する）
念（すぐれた瞑想を得ようと心を集中する）
思惟（すぐれた瞑想を得ようと智慧をもって思惟観察する）

・五根、五つの能力

信根
精進根
念根
定根
慧根

・五力、五つの行動力

信力
精進力
念力
定力
慧力

・七覚支、七つの悟りを構成するもの
念（身・受・心・法の状態を観察、気をつけていること）
択法（法を調べること）
精進（努力）
喜（修行を実践することで生まれる喜び）
軽安（心身の軽やかさ）
定（心を集中して乱さない）
捨（対象への執着がない状態）

・八正道

正見（正しい見解）
正思惟（正しい考え）
正語（正しい言葉）
正業（正しい行為）
正命（正しい生業）
正精進（正しい努力）
正念（正しい念慮、気づき）
正定（正しい集中）

[三毒を構成する煩惱]

・貪 とん

貪欲（とんよく）ともいう。むさぼり（必要以上に）求める心。

和文では「欲」・「おいしい」・「むさぼり」と表現する。

・瞋しん

瞋恚（しんに）ともいう。

怒りの心。「いかり」・「にくい」と表現する。

・癡ち

愚癡（ぐち）ともいう。

真理に対する無知の心。「おろか」と表現する。

[十界（じっかい）]

地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界

[六道（ろくどう）]

六道とは、主に人間の内面において繰り返される（輪廻）世界を指す。

・地獄界

あらゆる恐怖に苛まれた状態。地獄も参照。

・餓鬼界

眼前の事象に固執する餓鬼の状態。

・畜生界

動物的本能のままに行動する状態。食欲、睡眠欲、性欲、物欲、支配欲など、欲望のままに行動する状態を指す。

・修羅界

会話を持たず「武力」をもって解決を目指す状態。日常的な喧嘩から国家間の戦争に至るまでの全般を指す。

・人界

平常心である状態。だが、人間的な疑心暗鬼を指すともされる。

・天界

諸々の「喜び」を感じる状態。

[四聖（ししょう）]

・声聞界

仏法を学んでいる状態。

仏法に限らず、哲学・文学・物理学、さらには大衆娯楽や子供の戯言に至るまで「学ぶ」状態を指す。

・縁覚界

仏道に縁することで、自己の内面において自意識的な悟りに至った状態。仏界における「悟り」とは根本的に異なる。

・菩薩界

仏の使いとして行動する状態。自己の意思はともかく「行動」そのものを指すとされる。

・仏界

悟りを開いた状態。

[七仏通誡偈]

・諸悪莫作（しょあくまくさ） — （サツバ パーパッサ アカラナン）「一切の罪を犯さぬこと」

・衆善奉行（しゅうぜんぶぎょう） — （クサラッサ ウパサンパダー）「善に至ること」

- ・自浄其意（じじょうごい） — （サチッタ パリヨーダパナン） 「心を浄化すること」
- ・是諸仏教（ぜしよぶつきょう） — （エータンブッダーナ サーサナン） 「これがブッダたちの教えである」

[四無量心][四梵住]

- ・慈 - 「慈しみ」、相手の幸福を望む心。
- ・悲 - 「憐れみ」、苦しみを除いてあげたいと思う心。
- ・喜 - 「喜び」、相手の幸福や成功を共に喜ぶ心。
- ・捨 - 「落ち着き」、相手に対する平静で落ち着いた心。

[十号]

仏陀の10種の称号。如来十号。

- ・如来（にょらい）

真実のままに現れて真実を人々に示す者、

真実の世界に至り、

また真実の世界から来られし者を如去如来という。

- ・応供（おうぐ）

阿羅漢とも訳される。煩悩の尽きた者。応受供養の意で、人間・天上の者々から供養を受くるに足る有徳の士をいう。

- ・正遍知（しょうへんち）

一切智を具し一切法を了知する者。宇宙のあまねく物事、現象について正しく知る者をいう。

- ・明行足（みょうぎょうそく）

『大智度論』に依れば、明とは宿命・天眼・漏尽の過去現在未来の三明、

行とは身口意の三業、足とは本願と修行を円満具足することで、したがって三明と三業を具足する者をいう。

『涅槃経』に依れば、明とは無上正遍知（悟り）、行足とは脚足の意で、戒定慧の三学を指す。

仏は三学の脚足によって悟りを得るから明行足という。

- ・善逝（ぜんぜい）

智慧によって迷妄を断じ世間を出た者。好去、妙住ともいう。

善く因より果に逝きて還らぬという意味で、無量の智慧で諸の煩悩を断尽し世間を脱出した者をいう。

- ・世間解（せけんげ）

世間・出世間における因果の理を解了する者。

仏は世間の有情をよく了解することからいう。

- ・無上士（むじょうし）

惑業が断じつくされて世界の第一人者となれる者。

仏は衆生の中において最も尊き無上の大士なる意であるからいう。

『涅槃経』では「仏は無上士とも名付け、三宝中においては仏こそ最も尊上となす」と説く。

- ・調御丈夫（じょうごじょうぶ）

御者が馬を調御するように、衆生を調伏制御して悟りに至らせる者。

仏は大慈大悲を以て衆生に対し、あるいは軟語、あるいは苦切語・雑語を用いて調御し、時に応じて機根気類を見て与え、正道を失わしめない者であるという意。

- ・天人師（てんにんし、舎多提婆魔）

天人の師となる者。仏は正法を以て人間・天上の者を教導するから天人教師、すなわち天人師という。

・仏世尊（ぶつせそん）

煩惱を滅し、無明を断尽し、自ら悟り、他者を悟らせる者。真実なる幸福者。

仏は仏陀の略で智者・覚者の意、世尊とはあらゆる功德を円満に具備して、よく世間を利益し、世に尊重せらるるとの意で、世において最も尊いから仏世尊という。

[十二支縁起の要素]

1.無明（むみょう） - 過去世の無始の煩惱。

明るくないこと。迷いの中にいること。

2.行（ぎょう） - 志向作用。物事がそのようになる力=業

3.識（しき） - 識別作用=好き嫌い、選別、差別の元

4.名色（みょうしき） - 物質現象(肉体)と精神現象(心)。実際の形と、その名前

5.六処（ろくしょ） - 六つの感覚器官。眼耳鼻舌身意

6.触（そく） - 六つの感覚器官に、それぞれの感受対象が触れること。外界との接触。

7.受（じゅ） - 感受作用。六処、触による感受。

8.愛（あい） - 渴愛。

9.取（しゅ） - 執着。

10.有（う） - 存在。生存。

11.生（しょう） - 生まれること。

12.老死（ろうし） - 老いと死。

[五戒]

仏教において在家の信者が守るべきとされる基本的な五つの戒。

・不殺生戒（ふせっしょうかい） - 生き物を殺してはいけない。

・不偷盜戒（ふちゅうとうかい） - 他人のものを盗んではいけない。

・不邪淫戒（ふじゃいんかい） - 不道德な性行為を行ってはならない。

これは、特に強姦や不倫を指すが、他にも性行為に溺れるなどの行為も含む。

・不妄語戒（ふもうごかい） - 嘘をついてはいけない。

・不飲酒戒（ふおんじゅかい） - 酒を飲んではいけない。

[十戒]

沙弥の十戒

1.不殺生（ふせっしょう）：生き物を殺してはならない。

2.不偷盜（ふちゅうとう）：盗んではならない。

3.不淫（ふいん）：性行為をしてはならない。

4.不妄語（ふもうご）：嘘をついてはならない。

5.不飲酒（ふおんじゅ）：酒を飲んではならない。

6.不塗飾香鬘（ふずじきこうまん）：世俗の香水や装飾（貴金属）類を身に付けてはならない。

7.不歌舞觀聽（ふかぶかんちょう）：歌や音楽、踊りや映画等を鑑賞してはならない。

（ミュージカルやコンサート、スポーツ観戦も含む）

8.不坐高广大牀（ふごこうこうだいしょう）：膝よりも高い寝具や、装飾を伴うベッドに寝てはいけない。

9.不非時食（ふひじじき）：食事は一日二回で、それ以外に間食をしてはいけない。

10.不蓄金銀宝（ふちくこんごんほう）：お金や金銀・宝石類を含めて、個人の資産となる物を所有してはならない。

[十善戒]

菩薩としてなすべき十の良いことをすることの戒め。

- ・不殺生(ふせつしょう) 故意に生き物を殺さない。
- ・不偷盜(ふちゅうとう) 与えられていないものを自分のものとししない。
- ・不邪淫(ふじゃいん) 不倫をしない。
- ・不妄語(ふもうご) 嘘をつかない。
- ・不綺語(ふきご) 中身の無い言葉を話さない。
- ・不悪口(ふあくく) 乱暴な言葉を使わない。
- ・不両舌(ふりょうぜつ) 他人を仲違いさせるようなことを言わない。
- ・不慳貪(ふけんどん) 異常な欲を持たない。
- ・不瞋恚(ふしんに) 異常な怒りを持たない。
- ・不邪見(ふじゃけん) (善悪業報、輪廻等を否定する) 誤った見解を持たない。

[十不善業道]

殺生

不与取

邪淫

妄語

綺語

粗悪語

離間語

貪欲

瞋恚

邪見

[十善業道]

- ・殺生から離れること
- ・不与取から離れること
- ・邪淫から離れること
- ・妄語から離れること
- ・綺語から離れること
- ・粗悪語から離れること
- ・離間語から離れること
- ・無貪欲
- ・無瞋恚
- ・正見

[禁葷食(きんくんしょく)]

仏教の思想に基づく菜食の一種。

[布施の種類]

- ・財施とは、金銭や衣服食料などの財を施すこと。
- ・法施とは、仏の教えを説くこと。

- ・無畏施とは、災難などに遭っている者を慰めてその恐怖心を除くこと。
- ・和顔施（わがんせ）：笑顔を一に見せることが、それを見る人に幸福感を届け、一種の布施を行っていることになる、という考え。
- ・言辞施（げんじせ）：「和顔愛語」の愛語に相当。言葉で相手を傷つけないように気をつけること。

[三因仏性]

成仏のための3つの要素。

- ・正因仏性しょういんぶっしょう - 本性としてもとから具わっている仏性のこと
- ・了因仏性りょういんぶっしょう - 仏性を照らし出す智慧や、その智慧によって発露した仏性のこと
- ・縁因仏性えんいんぶっしょう - 智慧として発露するための縁となる善なる行いのこと

[十四誹謗（じゅうしひぼう）]

- ・（きょうまん） - 増上慢と同義。慢心。おごり高ぶり仏法を侮ること。
- ・懈怠（けたい） - 仏道修行を怠ること。
- ・計我（けいが） - 我見と同義。人間我に執着し、自分考えで仏法を判断すること。
- ・浅識（せんしき） - 自身の浅はかな知識によって正法を否定すること。
- ・著欲（じゃくよく） - 欲望に執着して仏法に不信すること。
- ・不解（ふげ） - 仏法を理解しようとせず自己満足すること。
- ・不信（ふしん） - 仏法を信じないこと。
- ・鬻蹙（ひんじゅく） - 顔をしかめて仏法を非難すること。
- ・疑惑（ぎわく） - 仏法を疑い惑うこと。
- ・誹謗（ひぼう） - 仏法を謗（そし）り悪口を言うこと。
- ・輕善（きょうぜん） - 仏法の善を信受する者を軽く見る・蔑視すること。
- ・憎善（ぞうぜん） - 仏法の善を信受する者を憎むこと。
- ・嫉善（しつぜん） - 仏法の善を信受する者に嫉妬すること。
- ・恨善（こんぜん） - 仏法を信受する者に対して恨みを抱くこと。

[菩薩五十二位]

- ・等覺（とうかく）

菩薩修行の階位である52位の中、51位であり菩薩の極位で、その智徳が略万徳円満の仏、妙覺と等しくなったという意味で等覺という。

- ・十地（じっち、じゅうち）

菩薩修行の階位である52位の中、第41～50位まで。

上から法雲・善想・不動・遠行・現前・難勝・焰光・発光・離垢・歡喜の10位。

仏智を生成し、よく住持して動かず、あらゆる衆生を荷負し教下利益することが、大地が万物を載せ、

これを潤益するからに似ているから「地」と名づく。

- ・十廻向（じゅうえこう）

菩薩修行の位階である52位の中、第31～40位まで。

上から入法界無量廻向・無縛無著解脱廻向・真如相廻向・等随順一切衆生廻向・随順一切堅固善根廻向

・無尽功德蔵廻向・至一切処廻向・等一切諸仏廻向・不壞一切廻向・救護衆生離衆生相廻向の10位。

十行を終わって更に今迄に修した自利・利他のあらゆる行を、一切衆生の為に廻施すると共に、

この功德を以って仏果に振り向けて、悟境に到達せんとする位。

・十行（じゅうぎょう）

菩薩修行の位階である52位の中、第21～30位まで。

上から眞実・善法・尊重・無著・善現・離癡乱行・無尽・無瞋根・饒益・観喜の10位。

菩薩が、十住位の終に仏子たる印可を得た後、更に進んで利他の修行を完うせん為に衆生を済度することに努める位。

布施・持戒・忍辱・精進・禪定・方便・願・力・智の十波羅密のこと。

・十住（じゅうじゅう）

菩薩修行の位階である52位の中、第11～20位まで。

上から灌頂・法王子・童真・不退・正信・具足方便・生貴・修行・治地・発心の10位。

十信位を経て心が眞諦（しんたい）の理に安住する、という意味で「住」と名づく。

あるいは菩薩の十地を十住という説もある。

・十信（じゅうしん）

菩薩修行の位階である52位の中、第1～10位まで。

上から願心・戒心・廻向心・不退心・定心・慧心・精進心・念心・信心の10位。

仏の教法を信じて疑心のない位。

なお、十信を外凡、十住～十廻向までを内凡あるいは三賢と称し、十信～十廻向までを凡と総称する。

また十地と等覚を因、妙覚を果と称し、十地～妙覚までを聖と総称し、凡と相對する。

[六神通]

仏教において仏・菩薩などが持っていると言われる6種の超人的な能力。

・神足通（じんそくつう） - 機に応じて自在に身を現し、思うままに山海を飛行し得るなどの通力。

・天耳通（てんにつう） - ふつう聞こえる事のない遠くの音を聞いたりする超人的な耳。

・他心通（たしんつう） - 他人の心を知る力。

・宿命通（しゆくみょうつう） - 自分の過去世（前世）を知る力。

・天眼通（てんげんつう） - 他人の過去世（前世）を知る力

・漏尽通（ろじんつう） - 自分の煩惱が尽きて、今生を最後に、生まれ変わることはなくなったと知る力。

[『沙門果経』]

（四禪の次に）「自身の身体が、元素から成り、父母から生まれ、食物の集積に過ぎず、恒常的でない衰退・消耗・分解・崩壊するものであり、意識もその身体に依存している」と悟れる（＝「身念住」（身念処））

（その次に）「思考で成り立つ身体（意生身）を生み出す」ことができる

（その次に）「様々な神通（超能力）を体験する」ことができる（以下、神足通）

「一から多に、多から一となれる」

「姿を現したり、隠したりできる」

「塀や、城壁や、山を通り抜けられる」

「大地に潜ったり、浮かび上がったりできる」

「鳥のように空を飛び歩ける」

「月や太陽をさわったりなでたりできる」

「梵天の世界にも到達できる」

(その次に) 「神のような耳 (天耳通) を獲得する」 ことができる

「神と人間の声を、遠近問わず聞くことができる」

(その次に) 「他人の心を (自分の心として) 洞察する力 (他心通) を獲得する」 ことができる

「情欲に満ちた心であるか否かを知ることができる」

「憎しみをいだいた心であるか否かを知ることができる」

「迷いのある心であるか否かを知ることができる」

「集中した心であるか否かを知ることができる」

「寛大な心であるか否かを知ることができる」

「平凡な心であるか否かを知ることができる」

「安定した心であるか否かを知ることができる」

「解脱した心であるか否かを知ることができる」

(その次に) 「自身の過去の生存の境涯を想起する知 (宿住通 (宿命通)) を獲得する」 ことができる

「1つ、2つ・・・10・・・100・・・1000・・・10000の過去生を想起できる」

「それも、幾多の宇宙の生成 (成劫)、壊滅 (壊劫) を通して想起できる」

「それも、具体的・詳細な映像・内容と共に想起できる」

(その次に) 「生命あるものの死と生に関する知 (死生通 (天眼通)) を獲得する」 ことができる

「生命あるものがその行為 (業) に応じて、優劣、美醜、幸不幸なものになることを知ることができる」

「生命あるものが (身口意の) 業の善悪により、善趣・天界や悪趣・地獄に生まれ変わることを知ることができる」

(その次に) 「汚れの滅尽に関する知 (漏尽通) を獲得する」 ことができる

「苦しみ (汚れ)、苦しみ (汚れ) の原因、苦しみ (汚れ) の消滅、苦しみ (汚れ) の消滅への道 (以上、「四聖諦」) を、ありのままに知ることができる」

「欲望・生存・無知の苦しみ (汚れ) から解放され、解脱が成され、再生の遮断、修行の完遂を、知ることができる」

[六根清浄 (ろっこんしょうじょう)]

人間に具わった六根を清らかにすること。

・六根

眼根 (視覚)

耳根 (聴覚)

鼻根 (嗅覚)

舌根 (味覚)

身根 (触覚)

意根 (意識)

[光明真言]

オン・アボキャ・ベイロシャノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン

オーン。不空遍照尊よ、大印を有する尊よ、摩尼と蓮華の光明をさし伸べたまえ、フーン。

[十七清浄句]

真言密教では、「自性清浄」という思想が根本にある。

人間は生まれつき汚れた存在ではないというものである。

- 1.妙適清浄句是菩薩位 - 男女交合の妙なる恍惚は、清浄なる菩薩の境地である
- 2.慾箭清浄句是菩薩位 - 欲望が矢の飛ぶように速く激しく働くのも、清浄なる菩薩の境地である
- 3.觸清浄句是菩薩位 - 男女の触れ合いも、清浄なる菩薩の境地である
- 4.愛縛清浄句是菩薩位 - 異性を愛し、かたく抱き合うのも、清浄なる菩薩の境地である
- 5.一切自在主清浄句是菩薩位 - 男女が抱き合って満足し、すべてに自由、すべての主、天にも登るような心持ちになるのも、清浄なる菩薩の境地である
- 6.見清浄句是菩薩位 - 欲心を持って異性を見ることも、清浄なる菩薩の境地である
- 7.適悦清浄句是菩薩位 - 男女交合して、悦なる快感を味わうことも、清浄なる菩薩の境地である
- 8.愛清浄句是菩薩位 - 男女の愛も、清浄なる菩薩の境地である
- 9.慢清浄句是菩薩位 - 自慢する心も、清浄なる菩薩の境地である
- 10.莊嚴清浄句是菩薩位 - ものを飾って喜ぶのも、清浄なる菩薩の境地である
- 11.意滋澤清浄句是菩薩位 - 思うにまかせて、心が喜ぶことも、清浄なる菩薩の境地である
- 12.光明清浄句是菩薩位 - 満ち足りて、心が輝くことも、清浄なる菩薩の境地である
- 13.身樂清浄句是菩薩位 - 身体の樂も、清浄なる菩薩の境地である
- 14.色清浄句是菩薩位 - 目の当たりにする色も、清浄なる菩薩の境地である
- 15.聲清浄句是菩薩位 - 耳にするもの音も、清浄なる菩薩の境地である
- 16.香清浄句是菩薩位 - この世の香りも、清浄なる菩薩の境地である
- 17.味清浄句是菩薩位 - 口にする味も、清浄なる菩薩の境地である

[仏教の経典]

・法句経（ほつくきょう、ダンマパダ）

[一章 対句の詩]

1 ものごとは、心が先行し、心が最大の原因であり、心をもとに作りだされる。

もしも、けがれた心によって、話したり、行動するならば、苦しみがついてくる。荷を運ぶ牛の足跡に車輪が従うように。

2 ものごとは、心が先行し、心が最大の原因であり、心をもとに作りだされる。

もしも、清らかな心によって、話したり、行動するならば、喜びがついてくる。影が離れないように。

3 「あの者は、私をののしった。私をなぐった。私に打ち勝った。私から奪った。」

このように怨みをいだく者、かれらの怨みははずまらない。

4 「あの者は、私をののしった。私をなぐった。私に打ち勝った。私から奪った。」

このような怨みをいだかない者、かれらの怨みはしずまる。

5 まことに、怨みに怨みをもって報いるならば、この世においては、怨みのしずまること
がない。

しかし、怨まないことによって、怨みはしずまる。これは、いにしえより続く真理である。

6 人々は知らない、〔争いによって〕破滅することを。この事を知るならば、争いはなくな
るだろう。

7 この世を価値あるものとみて暮らし、〔眼や耳など〕感覚器官を制御せず、食事の量を
知らず、怠けて精進しない者、

かれは悪魔に負けてしまう——弱い木が風で倒れるように。

8 この世を価値なきものとみて暮らし、感覚器官を抑えて、食事は量を知り、おこたること
なく精進する者、

かれは悪魔に負けることはない——岩山は風にもびくともしないように。

[二章 ”今に気づいている” こと]

21 今の瞬間に気づいていること、これは不死に続く道である。心が今を離れていること、
これは死へ続く道である。

今の瞬間に集中している者、かれらは生きている。今に生きていない者、かれらは死人に
等しい。

30 インドラ神はつとめはげんだので、神々の王者となった。つとめはげむことは称賛さ
れる。怠けることはいかなる場合も非難される。

[[三章 心]

37 心は遠くへさまよい、独りで動き、姿形はなく、胸の洞窟（心臓）に潜んでいる。心
を御【ぎよ】する人々は、死の束縛から脱するであろう。

41 この身体は間もなく地に倒れるであろう。用をなさない木片のように投げ捨てられ、
意識を失う。

43 母や父 またはどんな親戚が施す善よりも 正しい真理に向く心が われら
に最も大きな善を施すなり。

[四章 花]

50 他者の過ちや為したこと、為すべきを為さなかったことを見るのでなく、自己の為し
たこと、為すべきを為さなかったことを観よ。

[五章 愚か者]

60 眠れぬ者にとって夜は長い。歩き疲れた者にとって一里の道は遠い。正しい教えを知
らない愚か者にとって輪廻の道は長い。

67 行なった後で苦しむなら、その行為は悪である——涙を流して、泣きながら結果を受け
けるなら。

68 行なった後で苦しまないなら、その行為は善である——心楽しく、満足して結果を受け
けるなら。

[六章 賢者]

78 悪友とつきあうな。卑しい人間とつきあうな。善き友とつきあえ。立派な人物とつき
あえ。

84 自分のためであれ、他人のためであれ、子孫も、富も、権力も、不正な手段による繁
栄は望まない。

かれこそ実に、戒を守る者、智慧ある者、まことの教えを身につけた者である。

[八章 千]

103 戦場において百万の敵に勝利するよりも、唯一の自己に打ち克つ者こそがまさに最高
の勝者である。

[九章 悪]

122 「果報は来ないだろう」と思って善を軽んずべきではない。水が一滴ずつでも滴り落
ちるなら、大きな水がめでも満たされる。

<気づき>ある人が少しずつでも善を積み、やがて福德に満たされる。

[十章 暴力]

129 すべての者は暴力におびえる。すべての者は死を怖れる。自分に引き寄せて、殺して
はならない。殺さしめてはならない。

130 すべての者は暴力におびえる。すべての者にとって、命はいとおしい。自分に引き寄
せて、殺してはならない。殺さしめてはならない。

133 荒々しい言葉を言うな、言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は
苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

[十一章 老い]

146 何がおかしい。何を喜んでいるのだ。この世は燃えているのに。おまえたちは暗闇に
覆われているのに、ともしびを求めようとしない。

147 作りあげられた幻をよく見ろ。寄せ集めでつくられた、傷だらけの身体だ。病いと妄
想に満ちている。その中に永遠に留まるものなど存在しない。

148 老いてボロボロになった、この体は、病の巣となり、崩れるものとしてここにある。
腐りゆく体は、朽ち果てる。生命の行き着くところは死である。

149 秋に捨てられた瓜に似た、これらの骨は、鳩のような灰色をしている。このようなものを見ては、何の喜びがあるろう？

150 骨で城が作られ、肉と血が塗り固めてあり、老いと死と高慢と欺瞞【ぎまん】が収められている。

153 無数の生涯を、ただただ、私は流転してきた——「輪廻の原因」を探しながら。〔輪廻する〕生は、〔終わり無く〕繰り返し、〔ただの〕苦しみにすぎない。

154 輪廻の生存をつくるもとよ、おまえの正体は暴かれた。もう〔新たな〕肉体をつくることはないだろう。

おまえの機能は壊され、〔もはや〕作用することはない。心は次の生存を作り出す働きを失った。渴愛が尽きるに至ったのだ。

[十二章 自己]

160 自己の主は自己しかいない。自己の主として他に何者がいるというのだろうか。自己をよく修めたならば、得難き主を得る。

[十三章 世の中]

173 以前に悪いことをした者でも、善き行いによって、これを覆うならば、かれはこの世を照らす。雲を離れた月のように。

[十五章 幸い]

204 健康は最大の利得。足るを知るはこの上なき宝。信頼はすばらしい知人。そして"苦しみの消えた境地"は最上の楽しみである。

[十八章 心の汚れ]

255 虚空に足跡はない。外見が立派なだけなら修行者ではない。

〔一時的に、さまざまなものが〕組み合わさってできたものが、永遠に存続することはありえない。(端正な外見もいつか滅びてしまう。)

この真理を悟っている人は落ち着いている。

[二十章 道]

279 「すべてのものごとは、”我ならざるもの”である（諸法無我）」と智慧によって観る時、人は苦しみから離れ去る。これは清浄へ向かう道である。

[二十六章 バラモン]

400 怒ることがなく、誠実で、戒律をまもり、落ち着いている者——〔輪廻の原因を滅ぼして〕最後の肉体になり、自らを御【ぎよ】している

——そのような人がバラモンであると、私は説く。

401 蓮の葉のしずく〔は汚れた下の水に混じらない〕、錐【きり】の先の芥子粒【けしつ

ぶ】〔はくつつかず、執着しない〕、

それらのごとく、様々な欲に汚されない者——そのような人がバラモンであると、私は説く。

402 すでに、この世において、自分の苦しみが滅びたことを、はっきりと知るならば、
〔彼は〕生の重荷をおろし、束縛から逃れた者である

——そのような人がバラモンであると、私は説く。

[スッタニパータ]

[1.1 蛇]

1 体中に広がった蛇の毒を、〔すぐに〕薬で取り除くように、怒りが起こったのを〔その瞬間に〕取り除く修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

2 池に生えている蓮華を、水に入って折り取るように、愛着を完全に断ちきった修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

3 奔流する渴愛の流れを、完全に枯渇させ、断ちきった修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

4 激流が脆弱な葦の橋を壊すように、高慢を完全にほろぼした修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

5 無花果の木々に花を探し求める〔が得られない〕ように、諸々の生存のうちに真実なるものを見いださない修行者は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

6 様々な怒りが心のうちに存在しない修行僧は、〔怒りの〕有る無しすら問題にしない者である。彼は「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

7 様々な思考概念をを砕いて余すことなく、心の内がよく整えられた修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

8 行き過ぎず、退転せず、すべての戯論（認識における捏造機能、妄想）をのり越えた修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

9 行き過ぎず、退転せず、「すべてのものは虚妄である」と知っている修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

10 行き過ぎず、退転せず、「すべてのものは虚妄である」と知って欲（貪）を離れた修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

11 行き過ぎず、退転せず、「すべてのものは虚妄である」と知って渴望を離れた修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

12 行き過ぎず、退転せず、「すべてのものは虚妄である」と知って嫌悪（瞋）を離れた修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

13 行き過ぎず、退転せず、「すべてのものは虚妄である」と知って<愚かさによる無関心>（痴）を離れた修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

14 悪い習慣がまったくなく、悪の根を抜き取った修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

15 この世に還り来る条件となる<煩惱から生ずるもの>が存在しない修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

16 生存に縛りつける原因となる<諸々の妄想、及び下草から生ずるもの>が存在しない修行僧は「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

17 [解脱を] 妨げる五つ [の壁] を除き、悩むことなく、"疑"を乗り越え、矢を抜き去った修行僧は、「今世」も「来世」もともに捨て去る。

—蛇が古い皮を脱ぎ捨てるように。

[1.2 ダニヤ]

18 [牛飼いダニヤ] 「[もう] ご飯は炊けたし、乳搾りも終わった。わたしはマヒヤー河の土手の近くに、[妻子や使用人と] ともに住んでいる。

わが仮小屋は[屋根に] 覆われ、[内に] 火はともされている。そうして、[雨の] 神よ、もし望むなら雨を降らせよ。」

19 [世尊] 「怒りはないし、頑固さからは離れ去っている。わたしはマヒヤー河の土手の近くに、ひと晩、宿っている。

わが仮小屋は覆いはずされ（正体を現され）、[心の内] の火は消えている。そうして、[雨の] 神よ、もし望むなら雨を降らせよ。」

[1.3 犀（サイ）]

35 一切の生き物に対し、暴力を捨て、たとえひとりでも害することのない、その者は、子を望まずにあれ。

[いわんや] どうして仲間を[望むだろうか] 犀のように独り遍歴されよ。

[1.8 慈愛]

143 [解脱という] 目的をよくわきまえた者[すなわち出家者] が、静かな場所におもむいて為すべきこと。

有能で、まっすぐであり、正直で、人の言葉をよく聞き、穏やか[な心を持ち]、思い上がりのない者であるように。

144 足ることを知り、わずかの食物で暮し、[なすべき] 雑務が少く、簡素に暮らし、諸々の感覚器官が静まり、賢く、傲慢でなく、

[托鉢先の] 家で食りのない者[であるように] 。

145 智慧ある人たちが批判するようなことは、いかなることも為さないように。

安楽がありますように、無事息災でありますように、すべての生けるもの（有情）が、幸せでありますように。

146 およそ生きている者はすべて、動きまわるものでも、動きまわらないものでも、

長いものでも、大きいものでも、中ぐらいのものでも、短いものでも、微細なものでも、巨大なものでも、

147 見たことがあるものも、見たことがないものも、遠くに住むものも、近くに住むものも、すでに生まれたものも、

[今にも] 生まれようとしているものも、すべての生けるものが、幸せでありますように。

148 他人を欺いてはならない。どこにしようと、だれであろうとも、他人を軽んじてはならない。

互いに、憤り、怒りの想いから、他人に苦痛を与えることを望むことがないように。

149 あたかも、母がたったひとりのわが子を、命がけで守るように、すべての生きとし生けるものに対して、無量の（慈しみの）心を作りなさい。

150 全ての生命に対して、無量の慈しみの心を作りなさい。上に、下に、また横に、隔てなく怨みなく敵意なき心を育てるように。

151 立っているときも、歩いているときも、坐っているときも、横になっている時でも、眠らないでいる限りは、

この〔慈しみの〕心をしっかりとたもっているように。この状態は、「いまこの（この世における）梵天の境地」と呼ばれる。

152 邪見にとらわれず、戒を保ち、智慧の眼（正見（しょうけん））を具えて、諸々の欲望に関する執着を取り除いた人は、再び母胎に宿ることがない。

[3.14 迅速]

915 太陽の親族、聖なる者に、＜厭い離れること＞と＜寂静の境地＞について尋ねます。

どのように観察することで、修行僧は涅槃に至るのですか、世間において、何ものにも執着することなく。

916 （世尊が答えた）＜考える私が存在する＞という、＜迷いを生む妄想の根本＞のすべてを破壊せよ。

内部にある、いかなる渴愛の思いをも取り除くために、常に＜今に気づきながら＞、道を学ぶことにつとめなさい。

[4.2 学徒アジタの質問]

1032 [アジタ尊者がたずねた] 「世間は何によって覆われているのですか？ 世間は何ゆえに輝かないのですか？

世間をけがすものは何ですか？ 世間の大きな恐怖は何ですか？ それを説いてください。」

1033 [アジタに世尊が答えた] 「アジタよ。無明によって、世間は覆われている。強い欲と、怠惰の心ゆえに、世間は輝かない。

渴望によって生ける者はけがれる。苦しみが世間の大きな恐怖である、とわたしは説く。」

1034 [アジタ尊者がたずねた] 「煩惱の流れはすべてのところに向かって流れます。何が、その流れをせき止めるものとなるのですか？

何がその流れの防護なのですか？ 何によって、その流れは塞がれるのでしょうか？ それを説いてください。」

1035 [アジタに世尊は答えた] 「アジタよ。命ある者における煩悩の流れをせき止めるものは、<今に気づいていること>である。

<今に気づいていること>が煩悩の流れの防護である、とわたしは説く。智慧によって、それら（煩悩の流れ）は塞がれる。」

1036 [アジタ尊者がたずねた] 「まさに智慧と<今に気づいていること>であります。

では、<精神と肉体>（存在）は、いかなる場合に停止するのですか？ おたずねしますが、このことをわたしに説いてください。」

1037 「アジタよ。そなたが質問したことを、わたしはそなたに語ろう、<精神と肉体>（存在）が停止する所を。

識別作用（識）が減することによって、ここに（存在が）停止する。」

1038 「この世には、法（ダンマ）を完全に理解した人もいますが、学びつつある人もあり、凡夫もおります。

おたずねしますが、かれらはどのようにふるまうべきなのでしょう、それを語ってください。」

1039 「修行僧は、〔六つの感覚器官によって得られる〕欲望に耽けつてはならない。心が濁ってはならない。

あらゆる事柄に熟達して、<今に気づきながら>、旅を続けなさい。」

[仏説五蘊皆空経]

仏説五蘊皆空経（ぶっせつごうんかいこうきょう）

[日本語訳]

このように、わたしによって聞かれた。

あるとき、世尊はヴァーラーナシーの鹿野苑におられた。

そのとき、世尊は五人の比丘たちに告げて、このようにいわれた。

「比丘たちよ、このように知るべきである。肉体は自己[のもの]ではない。

もし[肉体が]自己[のもの]であるならば、肉体は、病むことなく、苦痛を受けることもない。

私がこのようになってほしいと思おうとわたしがこのようになってほしくないと思おう

と

そのようにならず[病み、苦痛を受け]、その欲するところに従うことはない。

それゆえ、このように知るべきである。

肉体は自己[のもの]ではない。

感覚、想念、志向、識別作用（心のはたらき）も同様である。

また次に比丘たちよ、どのように思うか。肉体は常であろうか、[肉体は]無常であろうか」

[比丘たちは]世尊にいった、「肉体は無常であります」世尊は[比丘たちに]いった、

「肉体はまさしく、無常である。このことは、苦である。あるいは苦苦であり、壊苦であり、行苦である。

しかるにわが声聞、多聞なる弟子たちよ、自己はあるとなすか、[自己は]ないとなすか。

肉体が自己であれば自己は数々の物質を持つことになる。肉体は自己に属するのならば、自己は肉体のうちにあるのだろうか」

「そうではありません、世尊よ」「[比丘たちよ]このように知るべきである。感覚、想念、志向、識別作用において、常であるのか無常であるのかも、また同様である。

およそ肉体であるものが何であれあるいは過去、未来、現在、内、外粗大なもの、微細なものすぐれたもの、おとつたもの遠くにあるもの、近くにあるもの

これらは、ことごとく自己ではないのである。比丘たちよ、このように知るべきである。”正知”をもって、感覚、想念、思考、識別作用のある所を、ただしく観察せよ。

過去、未来、現在においても、さきの如くに、”正知”をもって観察せよ。もしも、わが声聞、聖弟子たちよ、

この五つの構成要素（五蘊）を観察すれば自己を有すること（自己存在）も、自己がある所を以て（存在）すること（自己存在所）も無いということを知るべきである。

かくのごとく観察しおわれれば、この世に能取（主体）なく、所取（客体）などなく、（阿頼耶識による）変転などもない。

ただ、みずから悟り、涅槃に達する。[すなわち]わが生で輪廻は尽きた。清浄なる行は、すでに完成した。造作することもなくなった。

（もはや、私は）後の生存を受けることはない、と」

このように説いたとき、五人の比丘たちは、諸の煩悩において、心が解脱するを得、教えに確信をもって、修行をおこなった。

[般若心経]

般若心経（現代語訳）

[現代語訳]

般若心経（はんにやしんぎょう）

観音菩薩が、

深遠なる「智慧の波羅蜜」を行じていた時、

〔命ある者の構成要素たる〕五蘊は「空虚」であると明らかに見て、
すべての苦しみと災い〔という河〕を渡り切った。

「シャーリプトラよ、

色（肉体）は「空虚」と異なる。「空虚」は色と異なる。

色は「空虚」である。「空虚」は色である。

受（感覚を感じる働き）、想（概念）、行（意志）、識（認識する働き）もまた同様である。

シャーリプトラよ、

すべての現象（一切法）は「空虚」〔ということ〕を特徴とするものであるから、

生じることなく、滅することなく

汚れることなく、汚れがなくなることなく

増えることなく、減ることもない。

ゆえに「空虚」〔ということ〕の中には、

色は無く、受、想、行、識も無い

眼、耳、鼻、舌、身、意も無く、

色、声、香、味、触、法も無い

眼で見た世界（眼界）も無く、意識で想われた世界（意識界）も無い

無明も無く、無明の滅尽も無い

"老いと死"も無く、"老いと死"の滅尽も無い

「これが苦しみである」という真理（苦諦）も無い

「これが苦しみの集起である」という真理（集諦）も無い

「これが苦しみの滅である」という真理（滅諦）も無い

「これが苦しみの滅へ向かう道である」という真理（道諦）も無い

知ることも無く、得ることも無い

もともと得られるべきものは何も無いからである

菩薩たちは、「智慧の波羅蜜」に依拠しているがゆえに

心にこだわりが無い

こだわりが無いゆえに、恐れも無く

転倒した認識によって世界を見ることから遠く離れている。

過去、現在、未来（三世）の仏たちも「智慧の波羅蜜」に依拠するがゆえに

完全なる悟りを得るのだ。

それゆえ、この「智慧の波羅蜜」こそは

偉大なる呪文であり、

偉大なる明智の呪文であり、

超えるものなき呪文であり、

並ぶものなき呪文であり、

すべての苦しみを除く。

〔なぜなら〕 真実であり、偽りなきものだからである。

〔さて、〕 「智慧の波羅蜜」という呪文を説こう、

すなわち呪文に説いて言う：

"ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハー"

（往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に正しく往ける者よ、菩提よ、さ

さげ物を受け取り給え)

〔以上が〕般若心経〔である〕。

[聖仏母般若波羅蜜多経]

[現代語訳]

このように私は聞いた。ある時世尊は、王舎城・靈鷲山中において、千二百五十人の大比丘たち、諸々の菩薩たちと共に、円状になって滞在していた。

その時に世尊は、〔瞑想されて〕「”深淵なる光明”によって正しい法（ダルマ）を説く」という名の三昧に入られた。

時に観音菩薩が、〔釈迦牟尼〕仏の集会の中におられた。この菩薩は、すでに深淵なる「般若波羅蜜」をよく修行し、五蘊は自性において空であると観ていた。

その時尊者シャーリプトラは、〔釈迦牟尼〕仏の神通力を受けて、先に観音菩薩にたずねた、

「もし善男子・善女人が、この深淵なる「般若波羅蜜」の法門において、〔これを〕修学したいと願うならば、どのように学ぶべきでしょうか？」

時に観音菩薩は、尊者シャーリプトラに告げていった、

「汝はいま詳らかに聴け。汝のために説こう。もし善男子・善女人が、この深淵なる「般若波羅蜜」の法門において、

〔これを〕修学したいと願うならば、五蘊は自性において空であると観察すべきである。

どのようなことを<五蘊が自性において空である>というか？すなわち、色は空である。空は色である。色は空と異ならない。空は色と異ならない。

受・想・行・識・も、またその通りである。

シャーリプトラよ、この一切法は、このように空という性質であるから、生じられたものでもなく（無所生）、滅せられたものでもなく（無所滅）、

汚れたものでもなく、清らかなものでもなく、増えることもなく、減ることもない。

シャーリプトラよ、それゆえ空においては、色もなく、受・想・行・識もなく、眼・耳・鼻・舌・身・意もなく、色・声・香・味・触・法もなく、

眼界もなく、眼識界もなく、また眼界もなく、意識界もなく、

無明もなく、無明の尽もなく、また老死もなく、老死の尽もない。

苦・集・滅・道〔の真理〕もなく、知ることもなく、得るものもなく、得ることがない、ということもない。

シャーリプトラよ、菩薩は得ることがないゆえに、「般若波羅蜜」に相應する行のゆえに、心に執着するものもなく、とらわれるものもない。

執着もなく、とらわれるものもないゆえに、恐れはなく、一切の顛倒妄想から遠く離れている。

「究極の円満なる静けさ」を備える三世の諸仏たちは、この「般若波羅蜜」に依拠するがゆえに、「無上の完全なる悟り」を得る。

それゆえに知るべきである、「般若波羅蜜」は、広大なる明呪であり、超えるものなき明呪であり、並ぶものなき明呪であり、

一切の苦しみをよく除き、真実にして虚妄ならざる法である、と。

諸々の修行者は、このように学ぶべきである。

さあ「般若波羅蜜」の大いなる明呪を説こう、

タディヤター オーン ガテー ガテー パーラガテー パーラサンガテー ボーディ
スヴァーハー

（”タディヤター”、”オーン”、往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に正しく往ける者よ、〔聖なる仏母である〕菩提〔女尊〕よ、ささげ物を受け取り給え！）

[仏説観無量寿経]

仏説観無量寿経（ぶっせつかんむりょうじゅきょう）

[現代語意識文]

『仏の説きたまいし観無量寿経』

宋（劉宋）の元嘉中に良耶舎、訳す。

[序文]

私（阿難）はこのように聞いております、ある時、世尊（釈尊）が、王舎城の耆闍崛山の山中に、1250人の大いなる修行僧千二百五十人と共にいらっしやって、

また法の王子たる文殊菩薩を上首とする、32,000の菩薩たちも一緒にいらっしやった。

その時に王舎大城に阿闍世という名の一人の太子がいました。

提婆達多という名の悪友の教に随順して、父である頻婆娑羅王を捕らえ、七重の牢に閉じ込めた。

王の多くの臣を制して、誰一人牢に近づけないようにした。

王をつつしみ敬う韋提希という名の大夫人は、体を洗い清め、発酵乳に蜂蜜を混ぜた物に小麦粉や米粉を混ぜ、

それを清めた体に塗り、瓔珞（胸飾り）の中に葡萄の果汁を入れて、門番の目を盗み王に差し出した。

そして王は、夫人の身に着けた食べ物を食し葡萄汁を飲んで、水を求めて口をすすいだ。

口をすすぎ終わると、遥かに世尊のいらっしゃる耆闍崛山に向って、合掌礼拝して、

「摩訶目連（以降、目連）は、私の親友であります。願わくは、慈悲をおこして、我に八戒を授けてください」と申し上げた。

王が言い終えた瞬間に目連は、まるで鷹や隼の飛ぶように、すぐに王の元に到った。

それから目連は毎日、王の元に到り八戒を授けた。また世尊は、また長老の富楼那弥多羅尼子（以降、富楼那）を遣わして、王のために法を説き聞かせた。

このようにして37日が経ち、王は食事を取り、法を聞き得たがゆえに、顔色は穏やかで喜びに満ちていた。

ある時、阿闍世は、不審に思い門番に「父王は、まだ生きているのか。」と聞いた。

門番は、「阿闍世様。韋提希夫人は、身に食べ物を塗り、瓔珞に葡萄汁を入れて面会し、頻婆娑羅王に差し出しています。

沙門であられる目連尊者と富楼那尊者が、空よりやって来て、頻婆娑羅王のために法を説かれております。禁制できません。」と申し上げた。

それを聞いた阿闍世は、母に向かい、「我が母は賊である。賊の仲間である沙門（しゃもん）も悪人である。

人を幻惑させる呪術を使って、この悪王を長い間、死なないようにしている。」と怒りを顕わにして言った。

そして剣を抜きとり、自らの母を殺そうとした。その時に月光という名の一人の臣がいた。聡明にして智慧多き者であった。

そして月光は、耆婆という名の名医ともに、王に向かい礼拝して、

「阿闍世様。私は「遥か昔より今に至るまで、さまざまな悪王がいて国位を貪るがゆえに、その父を殺害した王子は一万八千に上る。」

と『毘陀論経』に説かれているのを聞いています。

しかし未だかつて人の道に背いて、母を殺害したという前例を聞いた事はありません。

阿闍世様が、今、母を殺害するならば、刹利（武士王侯族）の階級の名を汚してしまいま

す。

私どもは、聞くに堪える事ができません。これは梅陀羅（差別されている人々の一階級）どもの所業です。よってここに住まわれる事はできません。」

と申し上げ二人は劍の柄に手をかけて、後ずさった。

阿闍世は、その諫言を聞くと驚怖し、畏れ入り、耆婆に向かい「お前は、私の味方ではないのか。」と言った。

耆婆は、「阿闍世様、決して母を殺害してはいけません。」と断言した。

阿闍世は、この言葉を聞いて、懺悔して救いを求めた。すなわち、すぐに劍を捨てて、母を殺す事を止めた。

内官に向け命令を出して、母を宮殿の奥深くに幽閉し、再び出られないようにした。

幽閉された韋提希は、しだいに悲しみと不安で痩せ衰えていった。

遥かに世尊のいらっしゃる耆闍崛山に向って礼拝し、「真実の世界から来られし世尊よ、かつては常に阿難尊者を遣わしてくださり、私を慰問してくださいました。

今、私は悲しみと不安で塞ぎこんでおります。世尊は威厳と徳とがあまりにも尊く、拝謁させていただく術がありません。

どうぞ目連尊者と阿難尊者を遣わしてくださり、私に面会させてください。」と申し上げた。

そう言い終ると、悲しみの涙が絶え間なく流れて、遥かに世尊に向い礼拝した。

まだ礼した頭をあげない間に、耆闍崛山にまします世尊は、すぐに韋提希の心の内を知られて、即座に目連尊者と阿難尊者に命じて、空から韋提希の許に遣わした。

世尊も、耆闍崛山より王宮へお越しになられた。

韋提希が礼し終わり頭をあげた時、世に尊重される釈迦牟尼仏を拝謁した。

体は紫を帯びた金色にして、数百の宝石でできた蓮台に座っていらした。目連は左に、阿難は右に侍（はべ）る。

帝釈天、梵天、世界の護持する四天王（持国天・増長天・広目天・多聞天）たちは、虚空の中であって隅々まで天華を降らし供養されていた。

韋提希が、世尊を拝謁した時、胸元の瓔珞を絶ち切り、体を起こした後、投地した。

号泣して世尊に向かい、「世尊よ、私はどのような宿業があつて、このような悪しき子を産んだのでしょうか。

世尊よ、またどのような因縁がおありになって提婆達多を弟子とされたのでしょうか。

[得益分]

この様に世尊が説かれた時に、韋提希は五百の侍女たちとともに、仏の説かれる所を聞き、時に応じてすぐに極楽という名の世界の広長な有様を見させていただく事と、

無量寿仏の姿と観音・勢至の二菩薩の姿を見させていただく事を得て、歓喜心が生じ、今まで一度たりと経験した事がないと感激した。

心広くわだかまりがない完全円満な悟りを開き、

無生忍事物は本来、生ずることも滅することも無いという事を知り得る事ができた。

五百の侍女たちは、この上なく正しい悟りを獲たいという心をおこして、彼の仏国土に生まれたいと願った。

世尊は、「誰一人残されずに皆が、往生できるであろう。

そして、彼の仏国土に生まれれば、諸仏が目の前に現れ見る事のできる境地になるであろう。」と予言した。

無量の諸天、この上もなくすぐれた仏道に向う心をおこした。

[流通分]

その時に阿難は、すぐに座っていた場所より立ち上がり、世尊の前に進み出て、

「世尊、この経を何と名づけたらよいのでしょうか。この法の内、どの部分が最も重要であると受け止めるべきでしょうか。」と伺った。

世尊は、阿難に「この経を、『極楽国土・無量寿仏・観世音菩薩・大勢至菩薩を觀ず』と名づける、

また『業障を淨除し諸仏の前に生ず』と名づける。

あなたは、よく心の中にとどめ、忘れる事の無い様にしなさい。

この觀仏三昧を行う者は、この世で生あるうちに無量寿仏と観音・勢至の二菩薩の姿を見させていただく事ができるであろう。

もし立派な男女が、ただ仏の名と二人の菩薩の名を聞いただけでも、無量劫の生死の罪から免れるであろう。

言うまでも無く、憶念する者はなおさらである。

もし念仏する者がいるならば、知っておきなさい、念仏する者は人の中の白蓮華である。

觀世音菩薩・大勢至菩薩、その良き朋になるであろう。

この人は仏道の場に座して、諸仏たちの家（極楽浄土）に生まれるであろう。」と告げた。

続けて世尊は、阿難に、「あなたはこれらの言葉を常に心にとどめておきなさい。

これらの言葉を常に心にとどめるという事は、すなわち無量寿仏の御名を、常に心にとどめ続けるということです。」と告げた。

この様に世尊が説かれた時に、尊者目連・阿難と韋提希らは、仏の説かれる所を聞いて、みな大いに歓喜した。

[耆闍分]

その時、世尊の足は虚空を歩いて、耆闍崛山に還られた。

阿難は、広く多くの人々の為に先のような事を説いた。

無量の天人たち、龍・夜叉など八部衆は、仏の所説を聞いて、みな大きに歓喜して、仏を礼拝して退出していった。

『仏の説きたまいし観無量寿経』

[仏説阿弥陀経]

[現代語訳]

序説から結語迄は、鳩摩羅什の漢訳をベースとして、分かりにくかった所はサンスクリット語のものを引用した。

参考

中村元著『浄土経典』浄土宗『浄土日常勤行集』内「仏説阿弥陀経」

[序説]

『極楽の莊嚴と名づける大乘経』

姚秦（後秦）の三蔵法師、鳩摩羅什が詔を奉じて訳す

この様に私は聞いている。

ある時、仏（釈尊）は、舎衛国（シラーヴァスティー市）の祇樹給孤独園（ジェータ林の園）に滞在しておられて、

大いに敬われるべき千二百五十人もの修行僧たちと一緒におられた。

この人たちは、皆、大阿羅漢であり民衆に認められていた。

すなわち長老シャーリプトラ（舎利弗）、マハーマウドガリヤーヤナ、マハーカーシャパ、マハーカッピナ、マハーカーティヤナ、

マハーカウシティラ、レーヴァタ、シュッディパンタカ、ナンダ、アーナンダ、ラーフラ、ガヴァーンパティ、バラドヴァージャ、

カーローダーイン、ヴァックラ、アニルツダという面々の大弟子たち、ならびに諸々の多くの偉大な救道者・すぐれた人々、

すなわち、法の王子マンジュリー、救道者アジタ、救道者ガンバハスティン、救道者ニティヨーディユクタ、救道者アニクシプタドゥラなどの人々、

及びその他多くの人々もおられた。そしてインドラ（帝釈天）ら神々もともにおられた。

[正説]

その時、仏は、長老シャーリプトラに告げて言うには、

「これより西方、十万億もの仏国土を過ぎて、世界があるが、それを名づけて極楽という。

その仏国土には仏がおり、阿弥陀と号する。いま、現にましまして真理を説く。

シャーリプトラよ。かの佛国土をなにがゆえに名づけて極楽となすや。

その国の民衆は、もろもろの苦しみを受けて、ただもろもろの楽しみだけを受ける。故に、その佛国土を極楽と名づける。

また、シャーリプトラよ。極楽国土には、七重の欄楯（欄干のような石垣）、七重の羅網（とりあみ）、七重の行樹（並木）があつて、

みな、これ四宝（金・銀・青玉=瑠璃・水晶）であまねく取り囲む。故に、かの国を名づけて極楽という。

また、シャーリプトラよ。極楽国土には、七宝（金・銀・青玉=瑠璃・水晶・赤真珠・碼磧・琥珀）の池がある。

八功德（澄浄・清冷・甘美・輕軟・潤沢・安和・飢渴を除く・健康増進）の水が、その中に充滿している。

池の底には純ら黄金の砂が布かれている。池の四辺の階段は、金・銀・瑠璃・玻（水晶）からできている。階段の上には楼閣がある。

また、金・銀・瑠璃（青玉）・玻（水晶）・（琥珀）・赤珠（赤真珠）・碼磧で、これは嚴飾している。池中の蓮華は、大きい車輪のようだ。

その上、青色の蓮華には青光、黄色の蓮華には黄光、赤色の蓮華には赤光、白色の蓮華には白光があつて、

さまざまな色の蓮華はさまざまな色で輝き、さまざまな色に見える。

シャーリプトラよ。極楽国土には、このようにすぐれた性質の莊嚴を成就する。

また、シャーリプトラよ。かの佛国土は、天の音楽をかなで、黄金が地をなしている。

昼夜六時（一日を昼夜に二分、それぞれをまた三分して、六時となる）に、曼陀羅華を雨降らす。

その国の民衆は、常に清々しい朝に、おのおの花を盛る器をつかって、もろもろの妙華を盛り、他方の十万億の仏を供養し、昼の休息をもって、本国に還到し、

ご飯をたべ、座禅の眠気を覚ますためゆきつもどりつする。シャーリプトラよ。極楽国土には、このようにすぐれた性質の莊嚴を成就する。

また次に、シャーリプトラよ。かの国には、常に、種々のめずらしい雑色の鳥がいる。

白鵠（白い鵞鳥）・孔雀・鸚鵡・舍利（鷲）・妙音鳥（藪に似ている鳥）・共命の鳥（雉子の類）がそれである。

このもろもろの鳥、昼夜六時に、合唱する。

その声は、五根（悟りを得るための機根。信根・精進根・念根・定根・慧根）

・五力（信力・信仰、精進力・努力、念力・憶念、定力・禅定、慧力・智慧）

・七菩提分（悟りに役立つ七つ）。

扱法覚自・精進覚支・喜覚支・軽安覚支・捨覚支・定覚支・念覚支）

・八聖道分（=八正道）などのような法を教える。

その土の民衆は、この声を聞き終わって、みな、ことごとく仏を念じて、僧を念じる。

シャーリプトラよ。おまえは、この鳥は、実にこれ、罪報の所生（弱肉強食の世界における畜生）であるということだろうか。

いや、そのように見てはいけない。それはなぜだろうか。

かの仏国土には、三悪道（地獄・餓鬼・畜生）がない（死者の霊の行く世界がない、餓鬼の境地が存在しない）。

その、仏国土には、三悪道の名は無い。言うまでも無く、実体は無い。

このもろもろの鳥は、みな、これ、阿弥陀仏の法を説く声を広めようと欲して、仏の不思議な力で作りだされたものである。

シャーリプトラよ。かの仏国土には、微風が吹動して、もろもろの宝行樹および宝で飾られた網は、微妙の声を出す。

たとえば、百千種の楽を同時にかなでるようなものだ。

この声を聞く者は、みな、自然に念仏・念法・念僧の心が生じる。

シャーリプトラよ。かの仏国土には、このようにすぐれた性質の莊嚴を成就する。

シャーリプトラよ。おまえはどうおもうか。

かの仏を、どういうわけで、阿弥陀と号するのだろうか。

シャーリプトラよ。かの仏の光明は無量であり、十方の国を照らすのにさまたげが無い。

ゆえに、阿弥陀というのだ。

また、シャーリプトラよ。かの仏の寿命およびその民衆の寿命も、无量であり 阿僧祇劫

(一阿僧祇=十の百四十乗、一劫=極めて長い時間をあらわす単位) である。

ゆえに、阿弥陀と名づける。

シャーリプトラよ。

阿弥陀仏は、完全な悟りを開いてこのかた、いまに十劫になる。

また、シャーリプトラよ。かの仏に无量無辺の声聞の弟子がいる。みな、阿羅漢であり、これ、算数のよく知るところではない。

もろもろの菩薩衆も、またまた、このようである。

シャーリプトラよ。かの仏国土には、このようにすぐれた性質の莊嚴を成就する。

また、シャーリプトラよ。極楽国土には、民衆として生まれたものは、みな、これ不退転であり、

その中に多く、一生補処(菩薩の最高位)がおる。その数は、甚だ多い。これは、算数のよく知るところではない。

ただ、[菩薩の数を数えるだけでも] 无量無辺である阿僧祇劫ほどを要する。

シャーリプトラよ。民衆で極楽国土および聖衆のことを聞く者がいるならば、まさに思い立ってかの国に生まれることを願うべきである。

それはなぜであるか。このようなもろもろの立派な人とともに、みな浄土という同じ場所であいまみえることができるからである。

シャーリプトラよ。わずかな良い徳を積んでも、かの国に生まれることはできない。

シャーリプトラよ。もし、善男子・善女性がいて、阿弥陀仏の名号を説くことを聞き、その名号を心にとどめたもち考え、

一日二日でも、三日四日でも五日でも六日でも、あるいは七日でも、一心不乱であるならば、

その人の命が終わるときに臨んで、阿弥陀仏は、もろもろの聖衆（声聞と菩薩）とともに、その前に現在すであろう。

この人の命終わるとき、心は、転倒しない。

命が終わってすなわち阿弥陀仏の極楽国土に往生することができるのだ。

シャーリプトラよ。私は、この利を見る。ゆえに、この言葉を説く、

『もし、民衆がいてこの説を聞くならば、まさに、あの仏国土に生まれようと、願いを起こすべきだ』と。

シャーリプトラよ。私が、いま、阿弥陀仏の不可思議の功德を称賛するように、

東方にもまた、アクションビヤ（不動なる者）と名づける如来、メール・ドヴァジャ（スマールの幢幡を持つ者）と名づける如来、

マハー・メール（大いなる須称山）と名づける如来、メール・プラバーサ（須称山の輝きがある者）と名づける如来、

マンジュ・ドヴァジャ（妙なる幢幡を持つ者）と名づける如来などの恒河（ガンジス川）の砂の数ほどの諸仏がおり、

おのおの、その国において、広長の舌相（舌が鼻を覆えば、説く言葉に虚言が無いと信じられていた）を出し、

あまねく三千大千世界を覆って、この誠実の言を説きなさる、

『汝ら民衆よ。まさに、この、阿弥陀仏の不可思議の功德を称賛する、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経を信ずるべきだ』と。

シャーリプトラよ。南方世界に、ヤショー・プラバ（ほまれの光ある者）と名づける如来、

マハー・ルチ・スカンダ（大いなる炎のかたまりを持つ者）と名づける如来、メール・プラディーパ（須称山のように灯明ある者）と名づける如来、

アナンダ・ヴィーリヤ（限りなく精進をなす者）と名づける如来などの恒河（ガンジス川）の砂の数ほどの諸仏がおり、

おのおの、その国において、広長の舌相を出し、あまねく三千大千世界を覆って、この誠実の言を説きなさる、

『汝ら民衆よ。まさに、この、阿弥陀仏の不可思議の功德を称賛する、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経を信ずるべきだ』と。

シャーリプトラよ。西方世界に、アミターユス（無量寿）と名づける如来、アミタ・スカンダ（無量のかたまりを持つ者）と名づける如来、

アミタ・ドヴァジャ（無量なる幢幡を持つ者）と名づける如来、マハー・プラバ（大いなる光輝ある者）と名づける如来、

マハー・ラトナ・ケートゥ（大いなる宝の幢を持つ者）と名づける如来、

シュッダ・ラシュミ・プラバ（清らかなる光線のある者）と名づける如来などの恒河（ガンジス川）の砂の数ほどの諸仏がおり、

おのおの、その国において、広長の舌相を出し、あまねく三千大千世界を覆って、この誠実の言を説きなさる、

『汝ら民衆よ。まさに、この、阿弥陀仏の不可思議の功德を称賛する、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経を信ずるべきだ』と。

シャーリプトラよ。

北方世界に、マハー・ルチ・スカンダ（大いなる炎のかたまりを持つ者）と名づける如来、

ヴァイシヴァーナラ・ニルゴーシャ（その音があまねく鳴響いている者）と名づける如来、

ドゥンドゥビ・スヴァラ・ニルゴーシャ（その音声が太鼓の響きごとき者）と名づける如来、

ドゥシプラダルシャ（襲いがたき者）と名づける如来、

アーディティヤ・サンバヴァ（太陽から生まれた者）と名づける如来、

ジャーリニー・プラバ（網のようにひろく覆う光明ある者）と名づける如来、

プラバーカラ（光を放つもの、太陽）と名づける如来などの恒河（ガンジス川）の砂の数ほどの諸仏がおり、

おのおの、その国において、広長の舌相を出し、あまねく三千大千世界を覆って、この誠実の言を説きなさる、

『汝ら民衆よ。まさに、この、阿弥陀仏の不可思議の功德を称賛する、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経を信ずるべきだ』と。

シャーリプトラよ。

下方世界に、シンハ（獅子）と名づける如来、ヤシヤス（名声）と名づける如来、

ヤシャハ・プラバーサ（名声という光輝ある者）と名づける如来、

ダルマ（法）と名づける如来、ダルマ・ダラ（法を保つ者）と名づける如来、

ダルマ・ドヴァジャ（法の幢幡を持つ者）と名づける如来などの恒河（ガンジス川）の砂の数ほどの諸仏がおり、

おのおの、その国において、広長の舌相を出し、あまねく三千大千世界を覆って、この誠実の言を説きなさる、

『汝ら民衆よ。まさに、この、阿弥陀仏の不可思議の功德を称賛する、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経を信ずるべきだ』と。

シャーリプトラよ。

上方世界に、ブラフマ・ゴーシャ（梵天の音声ある者）と名づける如来、

ナクシャトラ・ラージャ（星たちの王）と名づける如来、

インドラ・ケートウ・ドヴァジャ・ラージャ（帝釈天の幢幡の王）と名づける如来、

ガンドーッタマ（最上の香りある者）と名づける如来、

ガンダ・プラバーサ（香りの光輝ある者）と名づける如来、

マハー・ルチ・スカンダ（大いなる炎のかたまりを持つ者）と名づける如来、

ラトナ・クスマ・サンプシピタ・ガートラ（身体が宝の花で飾られた者）と名づける如来、

サーレーンドラ・ラージャ（樹王サーラの王）と名づける如来、

ラトノートパラ・シリー（宝の蓮華のように美しい）と名づける如来、

サルヴァールタ・ダルシャ（一切の意義を見る者）と名づける如来、

スメール・カルパ（須弥山のごとき者）と名づける如来などの恒河（ガンジス川）の砂の数ほどの諸仏がおり、

おのおの、その国において、広長の舌相を出し、あまねく三千大千世界を覆って、この誠実の言を説きなさる、

『汝ら民衆よ。まさに、この、阿弥陀仏の不可思議の功德を称賛する、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経を信ずるべきだ』と。

シャーリプトラよ。お前の心においてどう思うか。

どういうわけで、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経と名づけるのか。

もし、善男子・善女人がおり、この、諸仏の説くところの阿弥陀仏の名およびこの経の名を聞くとするならば、

このもろもろの善男子・善女人は、みな、一切の諸仏に念じ護られているところとなり、
みな、この上なく正しい悟りより退転しないようにしようとするためである。

これゆえに、シャーリプトラよ。

おまえたちは、まさに、私の語および諸仏の説くところを信受すべきである。

シャーリプトラよ。

もし、人がいて、願いを起こそうとする人、もう起こした人、またはいまから起こす人、
阿弥陀仏の国に生まれようと欲せば、

このもろもろの人ら、みな、この上なく正しい悟りから退転しないようにすることができ、
かの国土において、もしはすでに生まれ、もしは今生まれ、もしはこれから生まれるだろ
う。

ものゆえに、シャーリプトラよ。

もろもろの善男子・善女人とは、もし道理を信じるものがあるならば、かの仏国土に生ま
れようとともて願いを起こすべきである。

シャーリプトラよ。

私は、いま、諸仏の不可思議の功德を称賛するように、かの諸仏らも、また、わが不可思
議の功德を称説して、この言をなす、

『釈迦牟尼仏は、よく、いとも成し難いことを成し遂げた。
すなわち、よく、現実世界の五濁（末世に生ずる避けがたい五種の穢れ）の悪世である劫
濁（時代の穢れ。社会悪）

・見濁（思想の穢れ）・煩惱濁（精神的悪徳がはびこること）・衆生濁（人間が心身と
もに弱くなり質的に低下すること）

・命濁（寿命が縮まること）の中において、この上なく正しい悟りをえて、一切の世間の
ために、信じがたい法を説かれた。これ、甚だ成し難きことである』

[結語]

仏、この経を説き終えると、シャーリプトラおよびもろもろの修行僧たち、一切の世間の
神々、心霊、人々は、

仏が説くことを聞き、歡喜して、信受し、礼をなして去っていった。

仏の説きたまいし阿弥陀経

[中論]

[現代語訳]

<1> 生ずることなく、滅することなく、常住でもなく、断滅でもなく

同一でもなく、異なることなく、来ることなく、去ることもない。

善く諸々の戯論を滅する、これらの因縁を説いた、

諸々の説法者たちの中で第一である、仏陀に私は敬礼する。

<2> 諸法は自ら生ずるのでもなく、他より生ずるのでもなく、

共に生ずるのでもなく、原因なく生ずるのでもない。それゆえ「不生」であると知る。

[宝行王正論]

宝行王正論

龍樹 作

真諦 訳

一部省略

[本文]

安樂解脱品

一切の障害から解脱し、莊嚴なる完全な徳を備えた、衆生のまことの善友である、一切智者に敬礼する。

正しい法は善を決定する。法を愛する大王よ、私はまさに法（ダルマ）によって〔教えを〕説き、器となる人（大王）に、法を注ぎ入れる。

まず楽の因となる法を説き、のちに解脱の法を説く。衆生はさきに安樂〔を得〕、次に解脱を得る。

善の道は楽とよばれ、解脱は<迷いの尽きること>とよばれる。この二つの因を要約して説けば、信と智慧のただ二つである。

信によって、よく法を保持し、智慧によって〔法を〕如実に了解する。二つの内では智慧が優れている。まず初めに信を起こしなさい。

殺すことで短寿となり、悩むことで多病を招く。盗みによって財産が少なくなり、国境を侵す（他人の妻を犯す）ことで多くの怨みを招く。

うそによって非難され、二枚舌によって親しい者たちが離れて行く。乱暴な言葉によって好ましくないことを聞くことになり、噂話によって、他人に憎み嫉まれる。

行き過ぎた欲によって求める所のものを失い、強い怒りによって恐怖を受ける。邪見によって誤ったとらわれが生じ、飲酒によって心が混乱する。

施しをしないことで貧しくなり、道に外れた生業によって欺誑に逢う。傲慢によって卑賤の生まれを受け、嫉妬によって威徳なき者となる。

怨みを抱き続けることで容貌が醜くなり、聡明な者に〔教えを〕尋ねないことで愚かになる。

これらの報いは人間としての境遇におけるものであり、先にまず悪趣を受ける。

愚か者は、一切の苦を除くこの法を聞いても、無知によって、怖れのない境地に怖れを抱く。

涅槃の境地にはこれ（苦）がない。どうして怖れることがあろうか？真実には空であると説かれていることが、どうして汝を怖れさせるだろうか？

解脱は無我であり、無蘊である。汝がこの法を聞いたならば、我と五蘊を捨てることを、どうして願わないのか？
無すら涅槃ではない。どうして有が涅槃であろうか。有と無の見解が残りなく滅びることが涅槃であると、ブッダによって説かれている。

邪見を要約して説けば、因果〔応報〕を否定することである。これは苦しみを充満せしめ、悪趣への最も重い因である。

正見を要約して説けば、因果〔応報〕を信じることである。よく幸いを充満せしめ、善趣への最も優れた因である。

智慧によって有無の見解が静まり、楽と苦を乗り越える故に、善悪の〔二〕道を離れる。これが解脱であるとブッダによって説かれている。

サーンキャ学徒、ヴァイシェーシカ学徒、ジャイナ教徒はアートマンを説く。彼らに尋ねよ「〔あなたたちは〕有と無〔の二見〕を越えることを説くか」と。

これら（外道の教え）は法とは言えない。有と無〔の二見〕を越える故に、汝は、深淵なるブッダの正教を不死の妙薬と知るべきである。

暁は去ることもなく来ることもなく、一刹那の間も留まる事がないように、もしも三世を越える性質とするなら、どうして世界が実有なのだろうか？

二世は去ることなく、来ることなく、現在は実に留まることがない。「世間は生じ、留まり、滅する」という、この言葉がどうして真実であろうか？

もしも常に変転があるならば、どうしてダルマ（法）が刹那滅ならざるものなのだろう。もしも刹那滅ならざるものならば、どうして変化があるのだろうか？

もしも刹那滅を、分具〔あるいは〕分滅である故にと語るなら、等証見ならざる故に、こ

の二つには道理がない。

もしも刹那滅であってすべて無くなるならば、どうして物はあるのか。もしも堅固にして刹那滅ならざるものならば、どうして物は成るのか。

これらは一刹那の三辺である。…自他によらずして成る。

好ましいものでも、好ましからざるものでも、老いて衰えた〔女〕でも、若い女でも、女の身体はすべて不浄なるものである。どこに欲を生じる所があるか？

他人を利するなら、毒であっても施しなさい。他人を害するなら、甘露であっても施してはならない。

大乘においては「不生」であり、小乗においては「滅」であるが、不生と滅は同じことからである。自らの義に反するなかれ。

[出家正行品]

初めに出家者は敬虔な心で、律において禁戒を修める。多く学び、学僧試験を論破する。

次に正精進の心を起こし、五十七種の粗大な煩悩を捨離する。それら（五十七種の煩悩）をこれから説こう。

五つの構成要素において、自性は空であり、個の実体（プドガラ）は存在しないにも関わらず、＜愚かさ＞によってアートマンを妄想する。これを我慢と説く。

間違った道を修めたために、実際は未だ上人道を得ずして、自身はすでに（これを）得たと妄想する。これを増上慢と説く。

自分の持ち物を捨てることを「布施」とよぶ。他を利することを「戒」とよぶ。瞋りから解脱することを「忍辱」とよぶ。善を多くなすことを「精進」とよぶ。

心がしずまることを「三昧」とよぶ。眞義を理解することを智慧とよぶ。一切の衆生をわが身のように利することを「悲」とよぶ。

布施によって富み、戒によって楽を受け、忍辱によって人々から愛され、

精進によって（煩悩）を焼き、三昧と智慧によって解脱し、悲によって一切の利益が生じる。

小乗において、いくつもの声聞の境地（四向四果）が説かれているように、大乘においてもまた「菩薩の十地」が説かれている。

[因縁心論]

龍猛菩薩 作

[現代語訳]

十二支に分別して、能仁（悟った人）は縁起を説いた。

〔十二支は〕 煩惱・業・苦の三種のうちに、完全に収められる。

初めの支と第八支と第九支は「煩惱」であり、第二支と第十支は「業」である。

残りの七つの縁起支が苦である。十二縁起支は、ただ三つにまとめることができる。

第三支より第二支が生じ、第二支より第七支が生ずる。

同じように〔第七支より〕第三支が生ずる。この生存の輪は次々に回っていく。

諸々の生存領域はただ因果だけであって、この中に衆生〔などというもの〕は存在しない。

ただ単に空なる現象（法）から、空なる現象が生じるにすぎない。

読誦、燈、鏡、及び印璽、火種、種子、梅、音声〔など、これらのごとく〕、

諸々の蘊は、連続性を保ち（相続）、〔新たな生を〕結ぶこと、〔しかも〕移転するのではないこと。〔これらのことを〕智者は省察するべきである。

きわめて微細な事柄において、断滅の見解を持つならば、

かれは不善なる因縁に〔よって〕、縁起の〔正しい〕意味を見ることはない。

この〔縁起する世界の〕中には〔実体として〕見いだされるべきものは無く、また少しでも確立されるべきことは〔何も〕無い。

真実（真）〔の立場〕から、実相（真）を観察することによって、実相（真）を〔本当に〕見たならば、解脱する。

[大乘破有論]

龍樹菩薩 造

施護 訳

[現代語訳]

一切智者である、諸々のブッダたちに敬礼する。

諸法をあるがままに了知すべきである。

これはどういうことであるか？

すなわち、一切自性は"無自性より生じ"、かつ、"無自性より生じる"のではない。

一切自性に、もしも生ずることがあるなら、かの自性は常住である。このような自性は真実ならざるものである。

たとえば空華のようなものである。諸法と虚空などを知るべきである。(…)一切縁法は虚空のごときのものである。

かの真実ならざるものの故に、何が”有る”というべきだろうか？(…)

諸法は、無因であり、かつ無果である。また、自性を得ることのできる諸業はない。これは一切に当てはまり、真実なるものがあるということはない。

世間が無いゆえに、出世間も〔また〕無い。一切〔有〕は生ずることなく、また自性も無い。

(…)世間がない故に出世間もない。何が諸法であって、生じたものであるのか？

[四弘誓]

[四弘誓現代語訳]

生きとし生きるものすべてを悟りの彼岸に渡そうという誓いの願

あらゆる煩惱を絶とうと言う誓いの願

仏の教えをすべて学び知ろうとする誓いの願

無上の悟りに至ろうと誓う願

願

仏教の戒律集 経典集 用語集 [仏教 密教 禅宗]は、
クリエイティブ・コモンズ 表示-継承 3.0 非移植 ライセンス (“CC BY-SA”)
GNU フリー文書利用許諾 (“GFDL”) です。

一部、文字が表記出来ない為、不完全な文もあります。

専門的な内容は、他の書物も合わせて参考にしてください。